

【教育振興支援助成報告】

『こども発達学科の学生による「発達障害および発達が気になる乳幼児」に対するインクルーシブ保育の社会コミュニケーション促進支援』
平成 31 (2019) ~令和 3 (2021) 年度和洋女子大学教育振興支援助成報告

金井智恵子、田島大輔、大神優子

Support for promoting social communication of inclusive childcare for
"infants with developmental disabilities and concerns about development"
by students of the Department of Child Development

KANAI Chieko, TAGIMA Daisuke, OGAMI Yuko

要旨

本稿は和洋女子大学教育振興支援助成プロジェクト『こども発達学科の学生による「発達障害および発達が気になる乳幼児」に対するインクルーシブ保育の社会コミュニケーション促進支援』の成果報告である。2019年度～2021年度までの3年間で、こども発達学科の学生が主体的に取り組んだプロジェクトである。本プロジェクトでは、学生による「地域連携型インクルーシブ保育」の支援の開発を行うことにより、和洋女子大学独自のインクルーシブ保育を確立することを目的とした。3年間を通じた、インクルーシブ保育によるグループ「子どもグループ」「保護者グループ」の実施により、学生の責任感・子どもの理解が深まり、保護者にとっても、学生や子ども同士の触れ合い、他の保護者との交流などの場になった。また、「保育者グループ」向け動画に関する質問紙調査を実施したところ、発達障害や発達が気になる子どもに関して、手軽な方法で専門家から学ぶことができる貴重な機会になった。そのため、今回の取組は、専門性の高い学生の育成、子どもと保護者の居場所作り、保育者の学びにつながる可能性がある。

キーワード：インクルーシブ保育 (inclusive childcare)、発達障害 (developmental disorders)、
発達が気になる子ども (Children concerned about development)、
乳幼児期の子ども (child in infancy)

1. はじめに

現在、わが国では、核家族化や地域交流の希薄化などにより、子育てにおける孤立が増えている。また近年では、発達障害や発達が気になる子どもの増加により、そのような子どもへのかかわりが分からないことで起こる、虐待などの深刻な問題が報告されている。したがって、「発達障害や発達が気になる子ども」に対する地域の子育て支援が大きな課題である。

しかしながら、わが国では、障害のある子どもを含めたインクルーシブ保育の体制整備は始まったばかりであるため、本保育支援法に関する研究もほとんどない。このような背景を踏まえ、過去に、学生によ

る「インクルーシブ保育に基づく地域子育て支援」を親子に実施したところ、学生にとっては、発達障害の子どもの理解が深まり、適切な対応が可能になったこと、参加者においても満足度が高いことが明らかとなった（金井，2014）。前回の支援実績・研究の結果を踏まえて、本プロジェクトでは、まず、学生が主体的に『地域連携型インクルーシブ保育』の支援を実施することにより、質の高い専門性をもつ学生を養成することを目的とした。次に、地域における適切な支援および家族や保育所のニーズに応じた支援につなげることを目的とした。

2. 3年間の取組概要及び各年度の主な内容

表1に示すような取組概要及び内容を、3年間各年度に行った。2021年度は保育者から「発達障害」「発達が気になる子ども」に関する質問の依頼が多かったため、保育者も対象に含めた（「保育者グループ」とした）。

画像や映像の使用については、使用目的及び個人情報の保護について口頭とmanaba course上の文書で説明し、学生の同意を得ている。

表1 3年間の取組概要及び各年度の主な内容

実施年度	学生教育の目標	「みつばちクラブ」の活動内容
2019	子どもの発達段階の特徴を理解する。	子どもグループ「お魚釣れるかな」 保護者グループ「子育ての困り感」 子どもグループ「豆まきと鬼ごっこ」 保護者グループ「子育てで工夫していること」 保護者グループ「アンケート実施」
2020	発達障害の知識や対応の理解を深める。	子どもグループ「ゲーチョコキパー」 保護者グループ「発達障害の特徴」 子どもグループ「つのはつのは」 保護者グループ「発達障害に関する疑問に答える1」
2021	責任感を伴う協働経験を通じて、専門性の高い保育者としての資質を高める。	子どもグループ「まあるいたまご」 保護者・保育者グループ「生涯発達から見た発達障害」 子どもグループ「おべんとうぼこのうた」 保護者・保育者グループ「発達障害に関する疑問に答える2」 保育者グループ「アンケート実施」

2-1. 2019年度「子どもの発達段階の特徴を理解する」

初年度はトライアルの段階である。市川市周辺の幼稚園・保育所・保健所、大学のHP等を通じて参加者の募集を行い、11月、2月に実施した。プログラムは子どもグループと保護者グループとに分かれて実施された。グループ活動は「みつばちクラブ」とした。子どものプログラムは、保育実践の専門家であり、保育士・幼稚園教諭の資格をもつ研究員である教員の指導の下、子どもの発達レベルにあった支援方法と、発達障害の子どもを対象とした「TEACHプログラム」「ABA（応用行動分析）」「ジャスパープログラム」に基づき、学生が指導案の作成をした。また、学生には、事前学習として、発達心理学、発達障害、保育実践の基本知識に関するミニ講義を行った。

活動では、担当児を決めて、学生が個別対応を行った。保護者グループでは発達障害の臨床経験も豊富であり公認心理師である研究代表者を中心に進め、学生が記録を取った。活動の最後に保護者に活動の振

り返りに関するアンケートを実施した。活動終了後は、学生との反省会を実施し、HP等を通じて活動報告を行った。

11月に実施された「お魚釣れるかな」(写真1、2)では、これまでの保育実習経験に基づき、活動で手遊びなどを行うことで、子どもの関心を惹きつけることができた。



写真1



写真2

活動の最後に実施した保護者からの活動に関するアンケートの内容については、「子どもは、人見知りや場所見知りが多いので、同年代の子どもたちと関わることができてよかった」「大学の学生と一緒に交流ができて、子どもがとても楽しそうで生き生きとしていた」という意見が最も多く、続いて、「3人きょうだいがいるお子さんのお母さんから、子育てについて話が聞けたので、大変なのは私だけではなく、みんな一緒なんだという気持ちになってよかった」「子育てについて悩んでいても、専門の施設に相談する勇気がないので、今回専門家の先生と話す機会ができたので、子育てに自信が持てるようになった」「外国人のため、子育てだけでなく、日本の文化に慣れることが大変であるが、今回色々な保護者の方と話ができたので、日本の文化の理解につながった」「大学が地域に開放しているのは、色々な意味で良いことだと思う。大学教育や研究を地域に公開し、連携できることは魅力である」という様々な意見が寄せられた。これらの意見をまとめると、保護者からは、学生や子ども同士の触れ合い、他の保護者との交流、専門家への相談の機会につながったため、参加してよかったということであった。

2-2. 2020年度「発達障害の知識や対応の理解を深める」

コロナウイルスの影響により、リモートによる活動を7、11月に実施した。学生には、事前学習として、生涯発達から見た発達障害の支援、保育の中で支援する方法について、ミニ講義とディスカッションの時間を設けた。

プログラムの指導方法については、子どもプログラムでは、教員の指導の下、学生が指導案(写真3)を作成した後、練習会を実施した(写真4)。当日はzoomを通じて、発達障害や定形発達の子どもの向けに手遊びの活動を行った(写真5、6)。写真5では、あそび歌作家である鈴木つばささんをゲストに呼んで、学生と一緒に手遊びをした。次に保護者グループでは、研究代表者と保育実践の専門家である研究者が、zoomを通じて、「発達障害の特徴」「発達障害に関する疑問に答える1」について説明をした後、ディスカッションを行った(写真7、8)。実施後には、学生との反省会を実施し、HP等を通じて活動報告を行った。

指導案

実習日 2020年7月16日(木) 3~5歳児

幼児の姿 人が行っていることを見て、一緒に動くことができる。 音楽に合わせて体を動かすことができる。			
ねらい 画面越しでも、動きを見ながら手遊びを楽しむことができるか。		内容 Zoomを活用しながら、子どもたちと楽しむことができる手遊びを行う。	
評価の観点 子どもが見ていることを意識して動き、自分たち自身が楽しんで行えたか。		準備するもの Zoomのミーティングルーム 手遊びの音(グーチョキパー)	
時間	環境構成・準備	予想される幼児の活動・姿	実習生の援助・配慮
13:00	<ul style="list-style-type: none"> zoomの背景を統一する。 背景画像を選択したときに体が見えなくならないように服の色を濃い目にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 画面を通して、保育者の声を聴く。 画面の前にいるが、話を聞いているようではない。 	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶 子どもに何を行うか伝える。 子どもが他に気を取られてしまわないように手短かに話す。
	<ul style="list-style-type: none"> 手遊びをする。 音楽と保育者に合わせて一緒に手遊びを行う。 歌を知っている子は一緒に歌いながら体を動かす。 音楽が聞こえたことで、画面に注目する子もいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 手遊び(グーチョキパー)をする 音楽を流し、笑顔で手遊びを行う。 映像に振ってお届けするため、左右反転させて手遊びを行う。 動きが見えやすいように、他の余計な動作はしないように心掛ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 手遊び(グーチョキパー)をする 画面の前に子どもがいることを想定してやれたか問いかける。 振り返り 画面の前に子どもがいることを想定してやれたか問いかける。 締めて終わる。

写真3



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8

2-3. 2021年度「責任感を伴う協働経験を通じて、専門性の高い保育者としての資質を高める」

コロナウイルスの影響により、リモートによる活動を4、11月に実施した。また、現場の保育者からのニーズの高さにより、保育者向けに動画を作成した。学生には、事前学習として、発達障害の基礎知識と支援方法、保育者としての専門性と資質について、ミニ講義とディスカッションの時間を設けた。

プログラムの指導方法については、子どもプログラムでは、教員の指導の下、学生が指導案(写真9)を作成した後、練習会を実施した。当日はzoomを通じて、発達障害や定形発達の子どもの向けに手遊びの活動を行った(写真10)。保護者・保育者グループでは、研究代表者と保育実践の専門家である研究者が、zoomを通じて、「生涯発達から見た発達障害」「発達障害に関する疑問に答える2」(写真11)について説明をした後、ディスカッションを行った。その後、Google formによる動画視聴と発達障害に関する質問紙調査を保育者グループに実施した。活動実施後には、学生と反省会を実施し、保育者の専門性と資質について話し合った。またHP等を通じて活動報告を行った。

時間	環境構成・準備	予想される幼児の活動・姿	学生の援助・配慮
9:40			<ul style="list-style-type: none"> ・事前準備 <ul style="list-style-type: none"> ①ホワイトボードに絵カードを貼っておく②受付の机を出す③マットやブルーシートをすぐ出せるようにしておく④製作の材料をグループごとに分け、机の上に置く(魚にはあらかじめ名前を書いておく)⑤好きな遊びのコーナーの配置をする ○受付開始 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもを笑顔で受け入れ、おやつを受け取り名札と出席シールを手渡す。 ○案内開始 <ul style="list-style-type: none"> ・泣いてしまう子どもがいた場合は、保護者へ一緒にどちらの部屋にいるか尋ねる。 ・担当の子どもを見守ったりともに遊んだりする。 ・遊びの様子を見て、玩具を少しずつ壁側へ寄せ、マットを用意する。
10:10	<p><ブレイルーム></p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ブレイルームに入る <ul style="list-style-type: none"> ・学生におやつを渡し、出席シールを受け取り貼る。 ・保護者と離れることを不安に思う子どもがいる。 ・学生の声掛けを聞き、好きな遊びをして過ごす。 	

写真9



写真10



写真11

2-3-1. 保育者対象質問紙調査の回答結果について

質問項目については、動画・発達障害や発達が気になる子どもについてである。質問項目の内容は、「動画の評価とその理由」「今度どのような内容の動画を見たいか？また今後、みつばちクラブとしての取組に望むことは何か？」についてである。

回答者は保育者が17名であった。

1. 動画の評価

保育者のうち、役立つ(16名)、普通(1名)であった。

2. 評価の理由(主な内容)

「保護者の不安軽減」

- ・専門家の話を聞いて、子育ての不安な気持ちを和らげるものであった
- ・子どもの投薬や受診に不安を抱えている保護者が多いので、不安を軽減できる内容であった
- ・保護者の不安な気持ちを安心させる内容であった

「保護者対応」

- ・保護者との信頼関係が大切だと認識した
- ・専門機関につなげる前に保護者と具体的にどのように関係を築けばよいかを理解できた
- ・保護者の気持ちを考えて他の専門機関と連携する大切さに気づけた
- ・保護者との関係を維持しながら、専門機関につなげる難しさを多くの職員が感じている。そのため他の職員にもこの動画を伝えて、みんなで考えていきたい
- ・保護者を医療機関につなげる時に壁を感じるが、この言葉を聞いて分野が違うだけで、壁がないことに気づいた

「動画の利点」

- ・動画は繰り返し視聴できる
- ・動画であればその場で視聴ができる点が良い。子どもの発達に心配がある保護者の中には、専門機関に足を踏み入れる勇気がない方も多いため、この動画を勧めたい

「役立つ内容」

- ・実践に役立つ内容であり、具体的でとても分かりやすかった
- ・服薬について理解が深まった
- ・大学の専門家から直接話が聞けることは貴重な機会だ
- ・保護者にとってもヒントになる内容であった

保育者からは、子どもの発達に悩んでいる保護者の不安軽減のこと、保護者との信頼関係の大切さを改めて認識したなど保護者対応のこと、その場で見ることができる動画の長所のこと、現場で実践的で役立つものであったこと、が主に理由としてあげられていた。

3. 今度どのような内容の動画を見たいか？またどのような取組を望むか？（主な内容）

「専門機関の紹介」

- ・児童発達支援センターなどで実施している療育内容を紹介してほしい
- ・療育センターでの取組を紹介してほしい
- ・専門機関とはどのような機関があるのかと、その機能を知りたい
- ・診断を受けると、どのような支援が受けられるのかを知りたい

「事例」

- ・発達障害児をもつ保護者の方の体験談を聞きたい
- ・様々な事例から支援方法を知りたい

「就学後の情報」

- ・就学前の時期に、特別支援学級などの情報を伝えると、保護者もイメージしやすい
- ・発達が気になる子どもの就学前の情報を知りたい

「質問に答える形式」

- ・保護者からの質問に対して答えていく取組は、悩みを抱えながら子育てをする保護者にとっては、役立つ情報が多いので良い
- ・発達が気になる子どもの対応について一問一答形式にすると分かりやすい

まず、発達障害や発達に気になる子どもに関わる専門機関の機能について、知りたいという要望が多かった。そのため、今後は児童発達支援センターなどに依頼して動画を作成する予定である。次に、具体的な指導のイメージが持てるように、事例を通じて子どもを理解したいという声が上がった。確かに、説明だけよりも、実際の事例を通じて子どもの特性や対応を理解することが大切であろう。また、就学後の特別支援に関する情報も必要である。近年は他職種連携が重要とされているため¹⁾、質の良いサービスを提供するためにも、他領域と連携をして、共通認識をもつことが望まれるだろう。今回動画は質問に答える形式が視聴者からすると見やすいという意見があった。今後も、視聴者視点の分かりやすい動画を意識して作成していく必要があるだろう。

3. 活動の宣伝

活動の宣伝のために、パンフレットとポスターを作成した(写真12、13)。このパンフレットは、本学の学生以外に、実習の訪問先、オープンキャンパスの来校者訪問などの機会を通じて配布した。実際にオープンキャンパスに来校した高校生が、本活動に関心をもったため、受験したケースがみられた。



写真12



写真13

4. まとめ

本活動を通じて、学生は保育者としてのインクルーシブ保育、発達障害などに関する知識が深まり、様々な子どもに対する関わりについて学ぶことができた。また、学生の役割分担により、協力して取り組む姿勢、責任感が身についたように思われる。さらに、学生にとっては、保育現場の実践場面において、インクルーシブ保育の支援に取り組むことができたため、卒業後は、専門性の高い保育者として活躍する可能性があるだろう。一方、子どもと保護者にとっても、社会コミュニケーションを育む場であったり、育児の悩みを相談する場になったと思われる。さらに、保育者にとっても、動画教材を通じて、手軽な方法で学ぶことができる機会につながった。今後も、地域連携型インクルーシブ保育の発展を目指して、適切な支援および家族や保育所のニーズに応じた支援を行うことが求められる。

参考文献

- 1) 土居裕和, 金井智恵子. 多職種連携を支える「発達障害」理解: ASD・ADHDの今を知る旅. 北大路書房, 2021, 248p., ISBN4-7628-3150-6.

金井智恵子（和洋女子大学 人文学部 こども発達学科 准教授）

田島 大輔（和洋女子大学 人文学部 こども発達学科 助教）

大神 優子（和洋女子大学 人文学部 こども発達学科 教授）

（2022年11月15日受理）